

毎月11日掲載

防災・減災のページ

むすび塾

神戸新聞社と共催 @兵庫・南あわじ

淡路人形座では、大津波警報が出ると、坂東千秋支配人(59)が「津波到達まで1時間弱ある。安全な高台に誘導するので、落ち着いてお待ちください」とアナウンス。座員が劇場内や駐車場の安全を確認した後、歩いて避難を始めた。避難場所までは、先導役とフォロワー役が観光客を挟むようにして移動。橋の崩落や建物の倒壊で道がふさがれた事態を想定し、迂回したり避難先を変更したりしながら、300人離れた高台にある福良八幡神社に約30分で行く。

観光客の避難誘導 検証



観光客から下り、高台を目指して避難を始める参加者

訓練は、紀伊半島沖から四国沖の「南海トラフ」を震源にマグニチュード9.0の巨大地震が発生し最大震度7を観測、大津波警報が出たとの想定。地元観光関係者や大学生に岩手、宮城両県の東日本大震災の語り部3人が加わり、計約50人が臨んだ。参加者は2班に分かれて行動。鳴門海峡の渦潮見学を終えて福良港に戻った観光客と、同港近くにある淡路人形浄瑠璃の専用劇場「淡路人形座」から、それぞれ避難場所を目指した。

観光客役は「避難場所に関する情報が少なく、津波到達までに無事避難できるのか不安」と話した。むすび塾があった3日は福良地区の22自治会主催による「津波避難訓練もあり、約460人が参加。地域全体で避難手順を確認した。」

避難の途中、観光客役(中央)が負傷したと見立てて介助する場面も



観光客役は「避難場所まで距離が長く、不安に感じた。地震発生時に正しい判断が難しい。避難場所の情報があっても、官公庁が連携すれば、防災に強い地域になれると感じた。訓練を重ねて意識を高めたい。淡路人形座」支配人 坂東千秋さん(59)

「南海トラフ」巨大津波想定

東日本大震災の教訓を今後に生かすため、河北新報社は3日、防災・減災ワークショップ「むすび塾」を兵庫県南あわじ市福良地区で開いた。神戸新聞社(神戸市)との共催で通算58回目。行楽地での観光客の安全確保をテーマに津波避難訓練を実施し、土地勘のない人をどう適切に避難誘導するかについて議論した。

むすび塾に参加して



【参加して】観光客の判断が、最悪を想定していれば想定した避難訓練は実施していいなかったが、東日本大震災の体験者の話を聞いて備える必要性を痛感した。避難場所や宿泊客への対応を決めて従業員に周知徹底し、安心して泊まれる旅館を目指したい。旅館若おかみ・榎本靖子さん(50)



【参加して】天災は防げないが、最悪を想定していれば想定した避難訓練は実施していいなかったが、東日本大震災の体験者の話を聞いて備える必要性を痛感した。避難場所や宿泊客への対応を決めて従業員に周知徹底し、安心して泊まれる旅館を目指したい。旅館若おかみ・榎本靖子さん(50)



【参加して】地震や津波を想定した避難訓練は実施していいなかったが、東日本大震災の体験者の話を聞いて備える必要性を痛感した。避難場所や宿泊客への対応を決めて従業員に周知徹底し、安心して泊まれる旅館を目指したい。旅館若おかみ・榎本靖子さん(50)



【災害に備えて】狭い路地に古い家屋が密集する福良地区は、地震による建物の倒壊や火災の発生が懸念される。迅速で安全な避難のため、避難路の整備を急がなければならない。津波の高さ表示も改めて兵庫県南あわじ市危機管理部長・佃信夫さん(59)



【訓練を終えて】お客さまの安全確保はもちろん、避難所として地域の人を受け入れる責任も背負っている。ホテル単独の訓練はしてきたが、今後はもっと地域と一体となって津波防災に取り組みたい。南淡路ロイヤルホテル総支配人・長船陽子さん(40)



【災害に備えて】劇場に来る観光客が高齢者が多く、安全に速やかに避難誘導するかが課題だと感じた。土地勘のない人に避難場所などの情報を分かりやすく伝えることも重要。訓練を重ねて意識を高めたい。淡路人形座」支配人 坂東千秋さん(59)



【訓練を終えて】訓練には体調不良を訴える観光客役で参加した。避難場所までは距離が長く、不安に感じた。地震発生時に正しい判断が難しい。避難場所の情報があっても、官公庁が連携すれば、防災に強い地域になれると感じた。訓練を重ねて意識を高めたい。淡路人形座」支配人 坂東千秋さん(59)



【訓練を終えて】地域全体で防災・減災を考え、訓練をすることがやはり過ぎはない。震災発生時に正しい判断が難しい。避難場所の情報があっても、官公庁が連携すれば、防災に強い地域になれると感じた。訓練を重ねて意識を高めたい。淡路人形座」支配人 坂東千秋さん(59)

年間88万人が来訪

南あわじ市福良地区は淡路島の南端にあり、福良湾に面する。人口約5100、世帯数約2400。年間88万人以上の行楽客が訪れる島屈指の観光拠点だ。集客のメインは鳴門海峡の渦潮見学コース。春と秋の大潮には世界最大級の直径20センチもの巨大な渦潮が楽しめる。世界自然遺産への登録運動も盛り上がっている。500年の伝統を誇る国の重要無形民俗文化財「淡路人形浄瑠璃」も人気で、専用劇場「淡路人形座」には国内外から観光客が訪れる。兵庫県の想定によると、南海トラフ巨大地震が起きると福良地区には地震から58分後に兵庫県内最大の8.1級の津波が押し寄せる。被害は福良地区を中心に市全体で死者1774人、全壊1万1260戸に上る見込みだ。

南あわじ市福良地区

市や福良町づくり推進協議会は「日本一の津波防災の町」を掲げ、夜間や早朝に避難訓練を実施したり、夜でも避難路を明るく照らす太陽光発電式の誘導灯を設置したりして対策に力を入れる。地区中心部は古い住宅と店舗が密集し、建物の耐震対策や避難路の確保が課題となっている。



専門家から

素早い行動開始が重要

神戸大都市安全研究センター教授 北後 明彦さん



津波の到達予想時間には不確定要素もあるが、大事なのは避難開始時間をいかに早くするか。避難先までの距離や移動手段を検討し、避難行動時間をいかに短くするかも重要だ。観光施設の従業員は、訓練を重ねて誘導手順を身に付けてほしい。今回の訓練で私が向かった避難場所福良口までは、距離が長い印象を受けた。高齢者の歩く速度は一般の人の4倍かかるとされ、通常なら15分まで到着できるところで1時間かかる。より早く高台所に行ける避難先の設定が必要だろう。福良地区では昨年11月に夜間の避難訓練を実施し、照明を設置して誘導する実験をした。観光客の避難も想定し、夜でも分かりやすい誘導灯が求められる。

スマホ使い情報周知を

減災・復興支援機構専務理事 宮下 加奈さん



観光客に避難場所を周知するのは難しい。スマートフォンでQRコードを読み取ると、自分がいる位置から一番近い避難場所が分かるシステムをつくるのはどうか。観光パンフレットや施設案内にQRコードを掲載し、地域情報と共に災害のリスクも伝えたい。避難誘導をする側の負担を減らすこともできる。高齢者が「この町で長生きしたい」と思えるまちづくりは、防災・減災にとっても大事な高台を子どもの遊び場に活用し、避難場所として認識してもらう取り組みがあると聞いた。時には高齢者も参加できる時間をとり、子どもたちと高齢者が一緒に交流できる機会を設けるのもいいだろう。

津波標識の再整備 急務

減災・復興支援機構理事長 木村 拓郎さん



南海トラフ地震で予想される被害には、阪神大震災より東日本大震災という性質がある。阪神でみられた家屋倒壊や火災、それに東日本の津波が一緒に起きる厄介な災害だ。だが、「敵が大きい」と諦めないでほしい。地震の揺れから身を守ることが大事。けがをしなければ何と逃げられる。家具の固定などの対策が津波避難の出発点だ。東日本大震災後、福良地区で想定される津波の高さは8.1級に見直されたが、それ以前の高さ(5.4級)を示した標識が混在している。観光客に分かりやすい表示を急ぐべきだ。避難路も整備しておきたい。福良地区の対策をアピールすることで、観光客は安心して訪問できる。防災に取り組む観光地の先駆けとなってほしい。